

## 小・中学校の教科目標の連続性を見据えた鑑賞教材の検討 ～感性を育む音楽科授業の教育内容および教育方法を考える～

土居 知子      大谷 正和  
(教育学科教授)      (教育学科教授)

本研究では、小学校および中学校音楽科の教科目標の共通性及び連続性を見据えながら、「音楽的な見方・考え方」に鑑み、音楽と生活や社会との関わりが見て取れる R. シューマンの《ユーゲントアルバム》Op.68、および M. ラヴェルの《マ・メール・ロワ》を鑑賞教材として取り上げる授業内容と方法について具体的に検討した。その結果、小学校から中学校へと連続した学びを意識した授業計画の重要性と、それぞれの成長段階に応じた様々な音楽活動の有用性を再認識し、また、鑑賞活動のみに留まらず、言語活動なども取り入れた教科横断的な授業の可能性も示唆することができた。

キーワード：小学校音楽科授業、中学校音楽科授業、音楽的な見方・考え方、鑑賞活動、ドイツロマン派およびフランス近代におけるピアノ作品

### 1. はじめに

平成 29 (2017) 年 3 月に告示された小学校および中学校学習指導要領の音楽科の目標では「表現及び鑑賞の(幅広い)活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽(、音楽文化)と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを旨とする」と明示されている<sup>1)</sup>。この中の「音楽的な見方・考え方」という視点をどのように捉えて実践していくかは、教員が熟考すべき大きな課題と言えるだろう。答申では「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働き視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること」と示されている<sup>2)</sup>。特に後半で言及されている「生活や文化と関連付ける」という文言から、児童生徒自身の生活や地域に根ざした伝統文化と、身の回りの音・音楽との関連性について気づき、思考しながら味わうことが求められていると解釈できる。日常の生活をより豊かなものにし、物事

に対する感性を養っていくために、身の回りの音や音楽に耳を傾けることを大切にすると同時に、音楽と社会との関わりを別の視点で見ながら、西洋音楽史上の大作作曲家が後世に遺した名曲について、その成り立ちや要素を学び、改めてその意義と価値を見出す学習も必要になってくるだろう。それぞれの作曲家が生まれ育った国や地域の歴史、文化、伝統等を踏まえて、楽曲をより深く味わい、曲に相応しい表現を見つけていくことが、音楽科授業の目標達成の一助となるのではないかと考える。そのような多角的な学習によって、音楽に対する興味・関心を深め、感性を磨き、諸外国の様々な音楽を享受できる児童生徒の育成を目指すことこそ、多様性を謳う現代の学校教育において意義あるものとなり得るのではないだろうか。

本稿では、これまで小学校・中学校の音楽科授業では取り上げられる機会の少なかった R. シューマン (Robert Schumann:1810～1856) と M. ラヴェル (Maurice Ravel:1875～

1937) のピアノ作品を鑑賞活動の教材として使用することを提案し、その教材価値について検討を進めていく。そして、小学校から中学校への「学びの連続性」も視野に入れながら、それぞれの段階に応じた活動の実践や知識の獲得を目指す、校種の枠にとらわれない授業実践方法についても併せて模索していきたい。

## 2. 研究の背景と目的

新学習指導要領は、小学校では2020年度から、中学校では2021年度から完全実施となった。各現場では、これまで示されてきた方向性の継続と同時に、新しい教育内容や授業実践方法の在り方を模索していたが、コロナ禍の下で我々の生活や教育現場の景色が一変してしまった。音楽の授業においては、これまでの歌唱活動・器楽活動の場面で取り扱うことができる内容と方法に多くの制限が強いられ、音楽科教育の現場ははまだ本来の姿を取り戻せていない状況にある。失望と混乱の中で、図らずも新たな視点での学びを構築していく必要性に迫られる現実と向き合うこととなった。また、こうした社会の激変に加え、児童生徒の資質・能力も多様化するなか、現場での柔軟な発想力や対応力が更に求められるようになってきたのも事実であろう。厳しい制限のなかで、「変わらず守っていくべきもの」と「新たに変えていくべきもの」の両立を目指す教育内容と教育方法の再検討は、今このような状況だからこそ最重要課題に転じたと言えるかもしれない。

このように、小学校および中学校の指導要領の「2内容 A 表現」にある歌唱の活動や器楽の活動が制限される状況のなかで、同じ〈A 表現〉に含まれる音楽づくりや創作の活動、および〈B 鑑賞〉の内容を従来の形に留まらず新たな視点で発展させ、授業の中で音楽の学びを止めずに豊かにする創意工夫が求められている現状が、この研究の背景となっている。

新学習指導要領の目標に掲げられている、児童生徒の「音楽的な見方・考え方を働かせる」ためには、まず教員側の「見方・考え方を柔軟に働かせる(変えていく)」べきであるのは明

らかであろう。そして、それは関わる人間だけではなく、教材そのもの、そして、具体的な授業方法においても当てはめられることができると言えるのではないだろうか。音楽づくりや創作の活動、および鑑賞の活動に関する指導については、学習指導要領に示されたねらいに沿いながらも、指導する教員の専門性や各々の考えによって、使用する教材の選択肢は比較的広くなると言える。本稿では〈B 鑑賞〉の事項を中心に据え、小学校および中学校の学習指導要領(音楽)に掲げられた教科目標の、「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成する」ことを目指し、学校現場で普段取り扱われる機会の少ない「ピアノ曲」を鑑賞教材とした新たな教育内容と教育方法の提案を行うことが目的である。今回は、小学校音楽科および中学校音楽科への学びの継続が可能と考えられる教材として、ドイツロマン派を代表するR. シューマンが作曲した子ども向けのピアノソロ作品《ユージェントアルバム》Op.68、そして、フランス近代を代表する作曲家M. ラヴェルのピアノ連弾作品《マ・メール・ロワ》を取り上げる。これらは、音楽以外の要素も含まれている教材として、教科目標に沿った多様な学びや気づきが同時共有できる可能性が考えられることから選択した。各作品の鑑賞活動および表現活動を通して、音楽構造の基礎的理解も目指しつつ、様々な国の歴史や文化、生活習慣といった副次的な学びも同時に得ることができる授業の在り方を検討していきたい。

## 3. 小学校および中学校音楽科の目標における共通性と連続性について

平成29年3月に告示された学習指導要領を見ると、小学校と中学校の目標や内容の方向性は基本的に同じであり、中学校でより具体的かつ発展的に示されていると言える。昨今、小学校・中学校の学びの連続性を視野に入れた教育が求められていることから、本節では小学校から中学校への移行期となる小学校第5学年及び第6学年と中学校第1学年の内容を取り上げて比較していくことにする。

まず、第1「目標」として「曲想と音楽の構造との関わりについて理解する」<sup>3)</sup>が共通項として挙げられており、この「曲想と音楽の構造との関わり」という文言は、第2「内容」A表現やB鑑賞においても再出している。これは、楽曲における主題やモチーフ（単一または複数）にどのような要素が見られ、曲全体にわたってどのように配置されているのか、それらの持つ特徴と性格、他の要素との関連性、また曲全体がどのような構造になっているのか等を理解した上で、それらがもたらす効果や印象について考える重要性を謳っていると解釈できる。小学校第1～4学年まではこの点に「気付く」と示されているのが、第5学年以降は「理解する」と明示され、自らの学びとしてははっきりと認識することが求められていると言えるだろう。

そして「音楽表現」に関しては、小学校では「表現に対する思いや意図を持つこと」とされているが、中学校では「音楽表現を創意工夫すること」というように、思いや意図のアウトプットを目指しており、段階的な漸進が見られる<sup>4)</sup>。つまり、小学校では自分がどのような表現をしたいのかをまず明確にすること、中学校では自分の意図を表現するために、自身で試行錯誤しながら最も適した方法を見出すことが要求されていると理解できる。また、小学校では「曲や演奏のよさなどを見だしながら音楽を味わって聴くことができるようにする」と示されているが、中学校では「音楽を自分なりに評価しながらよさや美しさを味わって聴くことができるようにする」となっている<sup>5)</sup>。中学校では音楽に対してその価値を適切に判断することが求められ、音楽のよさだけではなく「美しさ」も味わうことのできるより豊かな感性の涵養が重視されているのは、注目に値するだろう。

更に、「鑑賞」の活動に関連する文言の表現でも、小学校と中学校の目標において共通項を伴った漸進が見てとれる。小学校では「主体的に音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを味わいながら、様々な音楽に親しむ」「音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにしよとす態度を養う」<sup>6)</sup>と示され、中

学校では「主体的・協働的に表現及び鑑賞の学習に取り組み、音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽文化に親しむ」「音楽によって生活を明るく豊かなものにしていく態度を養う」<sup>7)</sup>となっている。

以上のことから、教育目標の共通性と連続性を視野に入れた内容となるよう工夫し、長期的な視点で音楽科教育を展開していくことが今後さらに求められるのは明白であろう。まずは「曲想と音楽の構造との関わりへの理解」を小中共通の基本的な目標とし、そして小学校から中学校へと段階的に自らの音楽表現を明確にしながら創意工夫の方法を見出し、学年を重ねるごとに音楽活動の楽しさを通して、より鋭敏で研ぎ澄まされた感性を養っていくプロセスの重要性を、改めて認識しておきたい。

#### 4. 鑑賞活動における副次的学習の可能性

前節では、小学校第5学年及び第6学年と中学校第1学年の学習指導要領に示された共通性と連続性について述べたが、ここでは、「第3内容の取扱い2(1)」に掲げられた項目を実現するための、鑑賞活動を通じた副次的学習の可能性について言及したい。

まず筆者が注目した文言は、「音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図り、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けられるよう指導を工夫すること（小学校学習指導要領）」「音や音楽が生活に果たす役割を考えさせるなどして、生徒が音や音楽と生活や社会との関わりを実感できるよう指導を工夫すること。なお、適宜、自然音や環境音などについても取り扱い、音環境への関心を高めることができるよう指導を工夫すること（中学校学習指導要領）」である<sup>8)</sup>。鑑賞指導にあたっては、各教科書に掲載されている教材以外にも、様々な時代の西洋音楽、民族音楽、我が国の音楽、ミュージカルなど多岐に亘るジャンルを取り上げ、音楽の多様性を学ばせる独自の工夫をしている教員は多いと考える。各指導要領のねらいを踏まえたうえで、教科横断的な教育をその中で実現させるために、音楽に関わる内容に限定せず、

日々の生活や社会の中で必要とされる〈思考力〉〈想像力〉〈感受能力〉〈豊かな人間性〉の育成に役立つような副次的な内容が含まれた教材を取り入れることで、音楽科授業において更に本質的な目標が達成できるのではないだろうか。〈あらゆる学びを有機的に結び付ける力〉を養うことこそ、これからの教育に求められている重要事項であると筆者は考える。

西洋音楽史上における作品には、作曲家の意図のもとに添えられた、言葉による直接的なメッセージや教訓が示されている楽曲がいくつ也存在する。音楽科授業でそれらを教材として取り扱い、作曲家自身の言葉を通じて生き方や思考を共有することで、親しむ機会の少ない作品をより身近に捉えることができ、言語活動をプラスしたコミュニケーション豊かな学びが可能となるだろう。また、西洋の童話などを題材にした楽曲からは、読書活動を取り入れることにより、豊かな想像力を膨らませ、話の内容や曲想への理解が更に深まることが期待できる。何れにしても、作曲家が生きた時代・国の当時の文化や生活習慣を知ること、物事の多様性を感じ取り、音楽と社会との関わりについて考えるきっかけが提供できるのであれば、音楽領域に限定されないオリジナリティーに富んだ授業が展開できると考える。

以上の見解を基に、次節からは、音楽科授業で取り扱う鑑賞教材に、国語科・生活科・道徳的な内容を含む特別科目等の内容を結び付けた教科横断的な学習の在り方を検討しながら、小学校音楽科、更には中学校音楽科の内容にも繋がる二つの授業実践例を提案していきたい。

## 5. R. シューマン作曲《ユーゲントアルバム》Op.68 を教材とした授業実践の検討

ここでは、通常はピアノ初心者指導の場で使用されることの多い、子どものための“古典的教材”の一つである、R. シューマン作曲《ユーゲントアルバム》Op.68 の一部を題材に取り上げ、小学校中学年～高学年の鑑賞教材としての有用性を検討していく。

### (1) 楽曲について

この作品は、1848年、長女マリー7歳の誕生日の贈り物として作曲された《マリーのための誕生日のアルバム》がベースとなっている。様々な構想の下に曲が加えられ、《子供たちのためのクリスマスのアルバム》へと発展した後、《ユーゲントアルバム》Op.68として計43曲が初版譜にまとめられた。第一部は18曲、第二部は25曲から成り立ち、各部の冒頭に‘幼い子供たち（年少者）のために’‘年上の子供たち（年長者）のために’と示されている。各曲には、想像力を掻き立てるシンプルなタイトルが付加されており、ドイツロマン派の標題音楽として、古くから愛され続けている。

### (2) 楽曲の特徴と教材化の視点

小学校学習指導要領（音楽）に示される「第2 各学年の目標及び内容」の中で、第5学年及び第6学年「3 内容の取扱い」の（3）を見ると、取り扱うべき鑑賞教材についての記述がある。そこには「諸外国の音楽など文化との関わりを捉えやすい音楽、人々に長く親しまれている音楽など、いろいろな種類の曲」、また、「音楽を形づくっている要素の働きを感じ取りやすく、聴く喜びを深めやすい曲」と具体的に示されている<sup>9)</sup>。鑑賞活動にふさわしい教材を検討する際には、基本的にこれらを念頭に置いて工夫を施していく必要があるだろう。

R. シューマン作曲《ユーゲントアルバム》Op.68の特徴として最も注目すべき点は、第二版を出版する際の付録として、シューマン自身による箴言集（Musikalische Haus- und Lebensregeln；音楽的家訓と処世訓）、言い換えれば、音楽や生活を取り巻く〈座右の銘〉が付け加えられたことであろう。これは67の項目に分かれており、音楽に関わるときに心得ておくべきことや、生活の中で意識すべきことが、理解しやすい表現で示されている。シューマン自身は、この曲集に掲げた言葉を通して、未来を担う子供たちに何らかのメッセージを遺したかったに違いない。

また、音楽的な内容でみていくと、第一部に



収められている楽曲は、音楽の三要素である「リズム・メロディー・ハーモニー」についてシンプルに感じ取りながら、その働きを考慮することができるものが多いことがわかる。この曲集を教材にすることで、各曲を構成する基本的な音楽要素を学びながら、古きドイツの音楽を味わって聴くことができ、それに加えて、言葉や思考、本国以外の文化や生活習慣に至るまでの他の要素についても同時に考えることができるなど、多様な目標が設定できるのではないだろうか。各曲に付されたタイトルも、「季節・行事・慣習などに関わるもの」をはじめ、「物語や文学的要素に関わるもの」「民謡・踊りに関するもの」等が並んでいるため、児童が興味を持ちそうな諸外国の文化・歴史について学ぶ一つの良い機会となり得るだろう。学習指導要領の大きな柱となる目標の達成に向けて、今後はこのような新しい視点で教材を選択していくことが重要であると考えられる。

### (3) 箴言集の言葉を通して得られる学びと気づき

ここでは、シューマンが遺した箴言集に収められた文言のいくつかを取り上げて、具体的な活動やそのねらいを考え、得られる学びと気づきの可能性について述べていきたい<sup>10)</sup>。

・[聴く耳を養うことが、一番大切です。小さいときから調性や音を判断できるように心がけなさい。鐘・窓ガラス・カッコウ…それらがどんな音を出しているかを聞き分けなさい。]

→今、耳を澄ませて何が‘音’として聴こえたかを発表させる。人間が生きる社会や自然界には、様々な音で溢れていることに気づかせ、それらが受動的に「聞こえる」「見える」状態に留まらず、能動的に「聴く」「見る」態度を養う。自然の様子や生活の中に在る景色が常に変化していくことに気づき、適切な言葉で表現する言語活動を展開する。

・[もし、みんなが第1ヴァイオリンを弾きたがったら、オーケストラはまともになくなってしまおうでしょう。ですから、それぞれの持

ち場にいる音楽家を尊敬しましょう。]

→主旋律を担う第1ヴァイオリンを全員が弾けば、オーケストラとしてどのような状態になり、音楽としてどのように聴こえるかを想像させ、その問題点について話し合う。全体を引っ張る存在となり、リーダーシップをとることだけがベストではなく、人それぞれに担うべき役割・持ち場があり、協力して尊重しあうことで世界(社会)がうまく成り立つということ認識させる。

・[古いものを尊敬しなさい。けれども、新しいものにも温かい心で接しなさい。知らない名前に対して、先入観を持ってはいけません。]

→自分の身近にある古いもの、新しいものそれぞれの良さや違いについて、発表させる。古いものを大切にすることを養い、新しいものも受け入れていく寛容性を持つことを学んでいく。また、未知のものに対しても心を開き、好奇心旺盛に自ら近づいていくことによって、見える世界が広がる可能性について話し合う。

・[学ぶことに終わりはありません。]

→まず「学ぶ」とは一体どのようなことであるのか、あらためて皆で考える機会を持つ。そして、今学びたいこと、将来学びたいことを発表しあい、それらを学び続けることによってどのように自分が成長していくかを想像させる。人は何のために学ぶのか、最終的にどのような目的があるのか等、哲学的な視点も絡めながら話し合っていく。こうした言語活動を中心としたコミュニケーションを通して、内なる自分と向き合いながら、‘他者を認める’‘違いを受け入れる’態度を養っていくことが可能となる。

### (4) 楽曲を通して得られる音楽的な学び

音楽にとって最も基本的な要素は、“音楽の三要素”である「メロディー」「リズム」「ハーモニー」であろう。他にも、音楽を特徴づけている要素としては「音色」「速度」「強弱」「調」「フレーズのまとまり」等が挙げられるが、学

習する曲にこれらの要素がどのように現れ、どう関わり合っているかを鑑賞活動のなかで理解するには、モチーフの反復が見られるシンプルな構成の作品を使用することが望ましいであろう。筆者の以前の論文では、『ユーゲントアルバム』Op.68 第一部に収められた各曲の特徴と学びの要素を挙げて考察を進めたが、本節では「音楽の三要素」が軸となり、小学校・中学校の音楽科授業の鑑賞活動および表現活動につながるであろう4曲をピックアップし、授業展開例を模索していく。

第1曲目の〈メロディー〉は、音楽の三要素の一つがそのまま題名になっている〔譜例1〕<sup>11)</sup>。右手に現れる旋律と左手が担う伴奏形のそれぞれの役割がハッキリとしており、鑑賞にとどまらず、その演奏に合わせて旋律線を歌い、伴奏との間に生じるハーモニーを感じ取る歌唱活動も行えるのではないだろうか。

〔譜例1〕



第2曲目の〈兵士の行進〉〔譜例2〕は、リズムを学びながらその楽しさを味わえる要素が見られる。多声構造の和音による付点リズム、休符を伴う2拍子の拍子感等がわかりやすく学べるだろう。鑑賞活動の際に、リズムに合わせて手拍子を行い、拍子とリズムを体感する活動も併用できると考える。

〔譜例2〕



第4曲目の〈コラル〉〔譜例3〕は、4声体のみで構成された作品である。鑑賞活動でそのハーモニーの豊かさを耳で体験した後、4声部に分かれた合唱の形でハーモニーを創り感じ取っていく歌唱活動にも繋がっていくと考えられる。また、更に応用した指導として、曲の冒頭以外の強弱記号が一切書かれていないことか

ら、和声進行をもとに音楽の起伏を考えたデュナーミク構成を考えさせ、和声の色合いの変化を味わわせることも有効なのではないだろうか。

〔譜例3〕



第10曲目の〈楽しき農夫〉〔譜例4〕は、単独で取り上げられる機会も多く、この曲集中で最もよく知られた作品と言える。左手にメロディーが現れ、右手がリズムと和声を担っていることが特徴的である。タイトルからも風景や楽曲の趣きが想像しやすく、農作業のあとで家路に向かう農夫の足取りや気分を味わうことができるだろう。多声的な構造であるため、音楽的な内容はやや複雑と言えるが、様々な楽器を使った合奏版に編曲し、アンサンブルの愉しみを体験できる教材としても応用が可能であると考える。

〔譜例4〕



このように、音楽の三要素がシンプルな形で盛り込まれ、モチーフの反復で成り立つ楽曲を鑑賞教材として使用すると、日頃は馴染みの少ないクラシック音楽であっても、比較的理解しやすく、他の活動とも組み合わせる有意義な授業を展開できるのではないかと考える。

また、第一部の楽曲を小学校音楽科の授業で取り上げることに続き、中学校音楽科ではそれと関連付けた発展的な授業と位置付けて第二部の楽曲を取り上げることも可能であろう。各種の活動を絡ませながらより高度な音楽的事項を学ばせたり、‘答えが見つからない問い’のような箴言集の内容を取り上げて意見を交換し合う授業を試みる等、小・中学校の連続性を持たせた授業展開の実現を目指す教材研究も、今後意義あるものとなるに違いない。



てイ短調の主要三和音が説明されており、いずれもV度の和音の第3音には当然ソにシャープが付いている。これは機能和声に基づく音階の導音として、主音の短2度下の音であり、主音に近づく働きが強い耳慣れた短音階の第7音である。ただこの〈眠りの森の美女のパヴァーヌ〉では、主音（終始音）の長2度下の音を含む旋法が持つ、古風で静寂な情緒を味わうことを目標としたい。5年生の『音楽のおくりもの』では、《星笛》（北村俊彦作曲：エオリア旋法）、《風とケーナのロマンス》（J.R. トーレス作曲：ドリア旋法）などの旋法を使用した曲が掲載されており、既にそれらの曲を学習している場合は、何かしらの親密さを感じることもあるだろう。また、中学校では《グリーンスリーブス》や《スカボローフェア》などとの関連性を示唆することも可能であろう。長調や短調とは異なる音組織の存在への気づきが、この曲における学習目標である。

第2曲〈おやゆび小僧〉は、やはりペローによる童話であり、飢饉によって両親から深い森に捨てられた7人兄弟とその末っ子「おやゆび小僧」が、帰り道の道標として森の道でパンくずを落としてみたものの、パンくずは小鳥たちに食べられて帰り道を見失い、途方にくれる場面が描かれている。

この曲の特徴は冒頭の変拍子である〔譜例6〕。2/4→3/4→4/4→5/4拍子と4分音符が1拍ずつ増えながら進んでいく独特の変拍子は、おやゆび小僧たち7人兄弟が行き先を見失い、森の中を彷徨っている様子を彷彿とさせる。この変拍子は楽譜を一見すると見慣れないものに映るであろうが、児童はどのような印象を抱くであろうか。



ここでは、一つひとつの音に文字を当てはめて言葉あそびをすることにより、変拍子に対してより抵抗を少なくすることを提案したい。前

述の拍子の経過に沿い、8分音符1個に対して1文字を割り振れば、文字数が4→6→8→10と2文字ずつ増えていくことになる。一例を挙げると「まよった(4)→もりのなかで(6)→おやゆびこぞうは(8)→パンくずまきちらして(10)」のように言葉を当てはめることができる。まず、この曲の内容に相応しい言葉を自由に児童に考えさせる言語活動を促し、言葉あそびのように唱えさせる。慣れてきて、一つの言葉を1フレーズとして拍感を伴って喋られるようになれば、変拍子に対する抵抗感はより少なくなるのではないだろうか。中学校では、ムソルグスキーの《展覧会の絵》より〈プロムナード〉や、ホルストの《惑星》より〈火星〉などの鑑賞活動から、変拍子や混合拍子についてより深く学習することも可能であろう。音楽の拍感は規則正しく律動的なものだけではなく、不均衡で安定しないものもあり、それがこれまでにない新たな表現につながることへの気づきが、この曲における目標である。

第3曲〈パゴダの女王レドロネット〉は、やはりフランスの作家ドーノワ夫人の『妖精物語』(1697)に収められている「緑の蛇」(Serpentin vert)に登場する女王の名前である。パゴダ(Pagode)は通常アジアの「寺院」や「塔」を意味するが、ここでは中国で作られた陶器の首振人形を指している。意地悪な妖精によって醜い姿に変えられたレドロネットと、やはり緑の蛇に変えられた王子が最後に結ばれる物語であるが、この曲では、城のお風呂に入ったレドロネットにパゴダ達が色々な楽器を演奏する場面を描いている。

この曲の特徴は言うまでもなく5音音階であろう。冒頭、高音から降り注いでくる5音音階の愛らしいパッセージは印象的で、児童は即座に惹きつけられるものと想像する。お風呂に入った女王レドロネットを喜ばせるために、中国人形たちが賑やかに様々な楽器を奏でている楽しい光景が目浮かぶ。また不気味な緑の蛇を想起させ、低音部でゆったりと歌われる中間部の主題も、同じく5音音階できている。二つの主題ともピアノの黒鍵のみを使った5音



音階であるが、冒頭の主題はファ#が終止音、中間部の主題はレ#が終止音となっており、その違いだけでも大きく印象が異なる。6年生の『音楽のおくりもの』では、児童がマリンバの派生音側（ピアノでいえば黒鍵側）に立って、5音音階による音楽作りを行う活動が掲載されているが、この活動とも関連させ、5音音階の多様な色彩感に触れさせたい。また中学校では、インドネシア、スコットランドなど様々な国において伝統的に用いられている音階であることにも触れ、広く世界の音楽に親しむきっかけも与えておきたいところである。

第4曲〈美女と野獣の対話〉の原作である『美女と野獣』（La Belle et la Bête）は、元々ガブリエル＝シュザンヌ・ド・ヴィルヌーヴ夫人の長編小説『若いアメリカ娘と海の物語』（1740）に登場したのが最初である。その後、ジャンヌ＝マリ・ルブラン・ド・ボーモン夫人によって1756年に刊行された『こどもの雑誌』のために、教育用に書き改めたものが広まっていった。日本では1992年に公開されたディズニーのアニメーション映画（原作からは脚色されている）でも有名であることから、児童生徒にとっては大変馴染みのある題材と言えよう。商人の末娘ベル（美女）が薔薇を盗んだ代償として野獣の城で身代わりとなるが、少しずつ野獣の優しさに気づき始め、散々迷い揺れながら最後は野獣の求婚を受け入れ、魔法が解けた瞬間に美しい王子が姿を表すという物語である。

冒頭、第1奏者によって奏される美女の主題はワルツの形式による優美なものであるが、49小節から第2奏者が左手で奏する野獣の主題は、対照的に低音域で半音下行していく不気味なものである。106小節からはそれら二つの主題が同時に重なり、二人の対話を表現している。その後、野獣の主題は少しずつ上行を繰り返しながら次第に第1奏者に近づいていく。そして頂点に達したところでグリッサンドにより魔法が解け、147小節から野獣の主題が第1奏者の右手高音で奏でられることにより、野獣は王子の姿に戻ったことを表している。この曲ではまず、それぞれの主題の性格の違いをはっきり捉

え、その絡み合いと変容していくユニークさを理解することを目標とする。そのための一案として、ピアノの鍵盤の真上から設置したカメラによって事前に演奏を撮影しておく。二人の奏者が鍵盤の低音域から高音域をどのように使っているのかを、はっきりと分かる動画として児童に見せれば、それぞれの主題の性格と変容をより明確に理解できるのではないか。また、ピアノによるグリッサンドは通常煌びやかな効果をもたらすが、この曲のように静かにゆったりと鍵盤を滑らせれば幻想的で全く別の印象をもたらすこと、ピアノという楽器の持つ無限の可能性についても示唆したい。

第5曲〈妖精の園〉は、組曲中この曲のみ特定の童話には基づいていない。ただ第1曲〈眠りの森の美女のパヴァーヌ〉で100年の眠りについた王女が、若い王子によって深い眠りから目を覚まし、魔法が解けるといふ物語の続きを想起させる感動的なフィナーレである。

この曲では、中間部の23～32小節を除いてはシンプルなハ長調（しかも臨時記号もほぼ出てこない）を貫いているにもかかわらず、響きの豊かさに圧倒される。多声部による対位的な動きの優美さもさることながら、ラヴェルが好んで用いた固有9の和音が随所に使われているのも、その一つの要因であると考えられよう。この曲において用いられている固有9の和音の一例を以下に挙げておく〔譜例7〕。



メシアンはこの9の和音について「ラヴェルはそれを大いなる感動の瞬間に用いることに着目したい」<sup>12)</sup>と述べていることにも注目し、9の和音の響きの美しさを味わうことを、この曲における学習目標としたい。基本的な三和音の上に更に3度上の音を二つ加えると、どのような響きの違いをもたらすのか、小学生の段階では理解が難しいと思われるが、中学生では基本的な三和音から発展した応用知識として覚えておくことも、音楽的感性の幅を広げていくの

に有用ではないだろうか。また小学校では、鍵盤ハーモニカを中心とした器楽合奏、中学校ではアルトリコーダーも含めたりコーダーと器楽による合奏として、この曲の響きの美しさを実際に味わう方法も考えられる。

以上、《マ・メール・ロワ》全5曲について鑑賞教材としての可能性を中心に検討したが、この曲は原曲のピアノ連弾版の他にもオーケストラ編曲版が存在することから、更に様々な楽器の音色を味わう鑑賞活動も可能となる。また、童話を題材にしていることから、朗読付きの鑑賞会を実施することも考えられよう。

また前述のようにペローの童話では、それぞれの物語の最後に教訓が添えられている。第1曲および第2曲の物語に関する教訓は、要約すれば以下のようなものである。

- ・「眠れる森の美女」→待つことは当たり前。待っていれば良いことがある。
- ・「おやゆび小僧」→兄弟が多いのは幸せなこと。いつもはばかにされている一人のおかげで一家が幸せになれることもある。

ドーナツ夫人による「緑の蛇」、ポーモン夫人による「美女と野獣」には教訓はないが、両作品に共通する教訓は次のようなものである。→容姿にとらわれず、心が美しいことが大切である。約束を守る<sup>13)</sup>。

残念ながら「緑の蛇」は現在邦訳による書籍の入手が極めて困難であるが、他の3作品は物語を読んで曲のイメージをより具体的に掴むこともできる。また上記の教訓について、「道徳」や「総合的な学習の時間」の内容とも連携した教科横断的な学習によって、広く音楽と社会との関わりについて考えるきっかけを提起することも、検討していく意義があるだろう。

## 7. まとめと今後の課題

本稿では、多岐に亘る学びの可能性を含む鑑賞教材を通して、より豊かな感性を育む音楽科教育が展開できるのではないかと考えた。そして、小学校および中学校音楽科における新しい視点で考えた授業の在り方を検討してきた。その具体的な方法として、これまで学校現場で

取り扱われる機会の少なかったドイツロマン派を代表する作曲家 R. シューマンのピアノソロ作品《ユーゲントアルバム》Op.68 と、フランス近代を代表する作曲家 M. ラヴェルのピアノ連弾作品《マ・メール・ロワ》の2曲を鑑賞教材とする具体的な教育内容と教育方法を提案し、その有用性について考察した。その過程で、小学校および中学校の学習指導要領（音楽）の内容にみられる教科目標の共通性と連続性を再認識し、学びの継続を視野に入れた長期的な視点で、音楽科教育を行うための具体的な教材研究を進めていく必要性が確認できたことは、大きな成果であった。

平成28年に新たな校種として規定された「義務教育学校」の指針からも分かるように、今後は小・中学校のカリキュラム連携、そして教育内容や方法の連続性を見据えた教科指導の構築がますます重要視されていくと考えられる。音楽科の場合は、小・中に共通する教科目標に明示された「音楽の見方・考え方」の多様性について熟考し、音楽に対する感性をより働かせるための指導の工夫や授業改革の実施が肝要となってくるであろう。そのためには、更に幅広い視点からの教材研究と共に、小・中一体となり連続的な学びを意識した綿密な授業計画、そして、それぞれの発達段階に応じた到達目標の設定が重要になってくるのではないだろうか。

しかし、今回提案した R. シューマンと M. ラヴェルの教材を使って実際に授業を行うことで、児童生徒がどのように反応し、その音楽を享受するかについては、十分に検証することができなかった。何らかの手立てをもって、実際の現場でこれらの授業を実施し、児童生徒がどのように音楽を理解して作品の良さを味わうことができるのか、どのような学習効果が得られるのかを観察する機会を得たいと願っている。この点を今後の課題としながら、引き続きクラシック作品の歴史的背景を重点に置いた音楽と社会との関わりについて研究を重ねつつ、それを学校現場の教育内容及び教育方法に反映させながら、新たな視座からの教材研究を継続していきたいと考えている。

最後に、本稿の執筆は、2・4・5を土居が、1・3・6を大谷が担当し、7は共同執筆したことを付記しておく。

### 【注】

- 1) 佐野靖『小学校・音楽科 新学習指導要領ガイドブック』（教育芸術社、2018）p.96、p.111  
（ ）は中学校学習指導要領－引用者
- 2) 同上書、p.13
- 3) 同上書、p.103、p.111
- 4) 同上書、p.103、p.111
- 5) 同上書、p.103、p.111
- 6) 同上書、p.103
- 7) 同上書、pp.111 - 112
- 8) 同上書、p.107、p.117
- 9) 同上書、p.106
- 10) 和訳は筆者によるものである。
- 11) 本稿における譜例作成にあたっては、ウィーン原典版『シューマン こどものためのアルバム 作品68』（音楽之友社、1979）を参照した。
- 12) メシアン『メシアンによるラヴェル楽曲分析』（全音楽譜出版社、2007）p.85
- 13) 中村千晶「マザー・グースについての一考察 その2」『関西学院大学教育学論究』第4号（2012）p.51

### 引用・参考文献

- ・有本真紀・阪井恵・津田正之の編著 2019『新版 教員養成課程 小学校音楽科教育法 2022年改訂版』教育芸術社
- ・小畑郁男・佐野仁美 2020『音楽を教えるヒント〔表現・創作・鑑賞〕—小中学校接続を視野に入れて—』ハンナ
- ・小原光一他監修 2022『小学生の音楽5』『小学生の音楽6』教育芸術社
- ・オレンシュタイン、アービー 2006『ラヴェル生涯と作品』（井上さつき訳）音楽之友社
- ・齊藤忠彦・菅裕編著 2019『新版 中学校・高等学校教員養成課程 音楽科教育法』教育芸術社
- ・佐野靖編著 2018『小学校・音楽科 新学習指導要領ガイドブック』教育芸術社
- ・佐野靖編著 2018『中学校・音楽科 新学習指導要領ガイドブック』教育芸術社
- ・初等科音楽教育研究会編 2020『改訂版最新初等科音楽教育法』音楽之友社
- ・高倉弘光編著・音楽授業ラボラトリー研究会著

- 2019『音楽授業の「見方・考え方」成功の指導スキル&題材アイデア』明治図書
- ・中等科音楽教育研究会編 2020『改訂版最新中等科音楽教育法』音楽之友社
- ・新実徳英監修 2022『音楽のおくりもの5』『音楽のおくりもの6』教育出版
- ・ニコルス、ロジャー 1987『ラヴェル』（渋谷和邦訳）泰流社
- ・西原稔 2013『シューマン 全ピアノ作品の研究 上・下』音楽之友社
- ・藤野紀男 2007『図説マザーグース』河出書房新社
- ・藤本一子 2008『作曲家 人と作品シリーズ シューマン』音楽之友社
- ・ペロー、シャルル 1996『ペローの昔ばなし』（今野一雄訳）白水社
- ・ポーモン夫人 2017『美女と野獣』（村松潔訳）新潮社
- ・三善晃監修 2012『中学器楽 音楽のおくりもの』教育出版
- ・メシアン、オリヴィエ、ロリオ＝メシアン、イヴォンヌ 2007『メシアンによるラヴェル楽曲分析』（野平一郎訳）全音楽譜出版社

### 〈論文〉

- ・土居知子 2017「R. シューマン《ユーゲントアルバム》Op.68をめぐっての一考察（I）－包括的な学びへと導くピアノ指導法を探る－」『京都女子大学発達教育学部紀要』第13号 pp.43-51
- ・中村千晶 2011「マザー・グースについての一考察」『関西学院大学教育学論究』第3号
- ・中村千晶 2012「マザー・グースについての一考察その2」『関西学院大学教育学論究』第4号

### 〈楽譜〉

- ・ウィーン原典版 1979『シューマン こどものためのアルバム 作品68』音楽之友社
- ・音楽之友社 1973『シューマン こどものためのアルバム 作品68』Paul Badura-Skoda 編集原典版
- ・Ravel, Maurice. *Ma mère l'Oye* (Urtext Edition) by Roger Nichols. Edition Peters, 2008.
- 〈インターネット〉
- ・Musikalische Haus- und Lebensregeln [https://www.schumann-zwickau.de/de/04/robert/haus\\_lebensregeln.php](https://www.schumann-zwickau.de/de/04/robert/haus_lebensregeln.php) (2022年11月2日閲覧)